

大正十二年九月一日の大震に際して

芥川龍之介

青空文庫



## 一 大震雜記

一

大正十二年八月、僕はいちいうてい一游亭と鎌倉へ行き、ひらのや平野屋別荘の客  
 となつた。僕等の座敷の軒のきさき先はずつと藤ふぢだな棚になつてゐる。そ  
 の又藤棚の葉の間にはあひだちらほら紫の花が見えた。八月の藤の花は  
 年代記ものである。そればかりではない。後架こうかの窓から裏庭を見  
 ると、八重やへの山吹やまぶきも花をつけてゐる。

山吹を指すや日向ひなたの撞木杖しゆもくづゑ

一游亭

(註に曰、一游亭は撞木杖をついてゐる。)

その上又珍らしいことは小町園の庭の池に菖蒲も蓮と咲き競つてゐる。

葉を枯れて蓮と咲ける花あやめ 一游亭

藤、山吹、菖蒲と数へてくると、どうもこれは唯事ではな

い。「自然」に発狂の気味のあるのは疑ひ難い事実である。僕は爾来人の顔さへ見れば、「天変地異が起りさうだ」と云つた。しかし誰も真に受けない。久米正雄の如きはにやにやしなながら、「菊池寛が弱気になつてね」などと大いに僕を嘲弄したものである。

僕等の東京に歸つたのは八月二十五日である。大地震はそれか

ら八日目やうかに起つた。

「あの時は義理にも反対したかつたけれど、實際君の予言は中あたつたね。」

久米も今は僕の予言に大いに敬意を表してゐる。さう云ふことならば白状しても好よい。——実は僕も僕の予言を余り信用しなかつたのだよ。

二

「浜町河岸はまちやうがしの舟の中に居をります。桜川さくらがは三孝さんかう。」

これは吉原よしはらの焼け跡にあつた無数の貼はり紙の一つである。

「舟の中に居をります」と云ふのは真面目まじめに書いた文句もんくかも知れな  
い。しかし哀れにも風流である。僕はこの一いちぎやう行ぎやうの中に秋風  
の舟を家と頼たのんだ幫間ぼうかんの姿を髻はうふつ髻ふつした。江戸作者の写よした吉  
原しはらは永久とこに還かへつては来ないであらう。が、兎とに角かく今こん日にちと雖いへども、  
かう云ふ貼り紙しやだつに洒脱しやだつの氣を示した幫間ぼうかんのゐたことは確かで  
ある。

## 三

大だい地震しんのやつと静しずまつた後のち、屋をくぐわい外がいに避難ひなんした人人は急いそに人  
懐なつしさを感じ出したらしい。向う三軒両隣を問はず、親おやしさうに

話し合つたり、煙草や梨なしをすすめ合つたり、互に子供の守りもをしたりする景色は、渡辺町わたなべちやう、田端たばた、神明町しんめいちやう、——殆ど至るほとん処に見受けられたものである。殊に田端たばたのポップラア倶楽部の芝生しばふに難を避けてゐた人人などは、背景にポップラアの戦そよいでゐるせゐか、ピクニツクに集まつたのかと思ふ位、如何いかにも楽しさうに打ち解とけてゐた。

これは夙つとにクライストが「地震」の中に描ゑがいた現象である。いや、クライストはその上に地震後の興奮が静まるが早いか、もう一度平生の恩怨おんゑんが徐おもむろに目ざめて来る恐しささへ描ゑがいた。するとポップラア倶楽部クラブの芝生しばふに難を避けてゐた人人もいつ何時隣なんどきの肺病患者を駆逐くちくしようとして試みたり、或は又向うの奥さんの私行を

吹ふいちやう 聴き して歩かうとするかも知れない。それは僕でも心得てゐる。しかし大おほぜい 勢せいの人人の中にいつにない親しさの湧わいてゐるのは兎とに角かく美しい景色だつた。僕は永久にあの記憶だけは大事にして置きたいと思つてゐる。

## 四

僕も今度は御ごたぶん多ぶん分に洩もれず、焼死した死骸しがいを沢たくさん山さん見た。その沢山の死骸のうち最も記憶に残つてゐるのは、浅草あさくさ仲店なかみせの収容所にあつた病人らしい死骸である。この死骸も炎ほのほに焼かれた顔は目鼻もわからぬほどまつ黒だつた。が、湯帷子ゆかたを着た体や瘦やせ

細つた手足などには少しも焼け爛れた痕はなかつた。しかし僕の忘れられぬのは何もさう云ふ為ばかりではない。焼死した死骸は誰も云ふやうに大抵手足を縮めてゐる。けれどもこの死骸はどう云ふ訣か、焼け残つたメリンスの布団の上にちやんと足を伸ばしてゐた。手も亦覚悟を極めたやうに湯帷子の胸の上に組み合はせてあつた。これは苦しみ悶えた死骸ではない。静かに宿命を迎へた死骸である。もし顔さへ焦げずにゐたら、きつと蒼ざめた唇には微笑に似たものが浮んでゐたであらう。

僕はこの死骸をもの哀れに感じた。しかし妻にその話をしたら、「それはきつと地震の前に死んでゐた人の焼けたのでせう」と云つた。成程さう云はれて見れば、案外そんなものだつたか

も知れない。唯僕は妻の為に小説じみた僕の気もちの破壊されたことを憎むばかりである。

## 五

僕は善良なる市民である。しかし僕の所見によれば、菊池寛きくちくわんはこの資格に乏しい。

戒嚴令かいげんれいの布しかれた後のち、僕は巻煙草を啣くはへたまま、菊池と雑談を交換してゐた。尤も雑談とは云ふものの、地震以外の話の出た訣わけではない。その内に僕は大火の原因は○○○○○○○○さうだと云つた。すると菊池は眉まゆを挙げながら、「謊うそだよ、君」と一いつか

喝した。僕は勿論さう云はれて見れば、「ぢや謔だらう」と云ふ外ほかはなかつた。しかし次手ついでにもう一度、何なんでも〇〇〇〇はボルシエヴィツキの手先ださうだと云つた。菊池は今度は眉を挙げると、「謔さ、君、そんなことは」と叱りつけた。僕は又「へええ、それも謔か」と忽ち自説（？）を撤てつくわい回した。

再び僕の所見によれば、善良なる市民と云ふものはボルシエヴィツキと〇〇〇〇との陰謀の存在を信ずるものである。もし万一信じられぬ場合は、少くとも信じてゐるらしい顔つきを装よそほはねばならぬものである。けれども野蛮やばんなる菊池寛は信じもしなければ信じる真似まねもしない。これは完全に善良なる市民の資格を放棄ほうきしたと見るべきである。善良なる市民たると同時に勇敢なる自警じけいだ

団んの一員たる僕は菊池の為に惜をしまざるを得ない。

尤もつとも善良なる市民になることは、——兔とに角かく苦心を要するものである。

## 六

僕は丸の内の焼け跡を通つた。此ここ処を通るのは二度目である。

この前来た時には馬場ばばさき先の濠ほりに何人も泳いでゐる人があつた。けふは——僕は見覚えのある濠ほりの向うを眺めた。堀の向うには薬研やげんなりに石垣くづの崩れた処がある。崩れた土は丹にのやうに赤い。崩れぬ土どて手は青芝あひかの上はらすに不相あひか変松をうねらせてゐる。其そこ処にけふも

三四人、裸の人人が動いてゐた。何もさう云ふ人人はすゐきやう酔興に泳いでゐる訣わけではあるまい。しかし行かうじん人たる僕の目にはこの前も丁度ちやうど西洋人の描ゑがいた水浴の油画か何かのやうに見えた、今日もそれは同じである。いや、この前はこちらの岸に小便をしてゐる土工があつた。けふはそんなものを見かけぬだけ、一いつそう層平和に見えた位である。

僕はかう云ふ景色を見ながら、やはり歩みをつづけてゐた。すると突然濠の上から、思ひもよらぬ歌の声が起つた。歌は「懐なつかしのケンタツキイ」である。歌つてゐるのは水の上に頭ばかり出した少年である。僕は妙な興奮を感じた。僕の中にもその少年に声を合せたい心もちを感じた。少年は無心に歌つてゐるのであらう。

けれども歌は一瞬あひだの間あひだにいつか僕を捉とらへてゐた否定の精神を打ち破つたのである。

芸術は生活の過くわじよう剩じようださうである。成なるほど程ほどさうも思はれぬこ

とはない。しかし人間を人間たらしめるものは常に生活の過剩である。僕等は人間たる尊嚴の為に生活の過剩を作らなければならぬ。更に又たく巧たくみにその過剩を大いなる花はな束たばに仕上げねばならぬ。生活に過剩をあらしめるとは生活を豊富にすることである。

僕は丸まるの内うちの焼け跡を通つた。けれども僕の目に触れたのは猛また火も亦また焼き難い何ものかだつた。

## 二 大震日録

八月二十五日。

一 游亭いちいうていと鎌倉より帰る。久米くめ、田中たなか、菅すが、成瀬なるせ、武川むかはなど停車場へ見送りに来る。一時きたごろ新橋しんばし着。直ちに一游亭とタクシイをか駆り、聖路加病院せいろうかに入院中の遠藤古原草ゑんどうこげんさうを見舞ふ。古原草は病殆ど癒えほとん、油画具など弄もてあそび居たり。風間直得かざまなほえと落ち合ふ。聖路加病院は病室の設備、看護婦の服装等とう、清楚せいそ甚だ愛すべきものあり。一時間の後のち、再びタクシイを駆りて一游亭を送り、三時ごろやつと田端たばたへ帰る。

八月二十九日

暑気はなはだ甚し。再び鎌倉に遊ばんかなどとも思ふ。薄暮はくぼより悪寒をかん。

検温器を用ふれば八度六分の熱あり。下島先生しもじまの来診らいしんを乞ふ。流行性感冒のよし。母、伯母をば、妻、児等こら、皆多少風邪ふうじゃの気味あり。

八月三十一日。

病聊いささか快こきを覚ゆ。床上「澀江抽齋しぶえちうさい」を読む。嘗て小説「芋粥もがゆ」を艸さいせし時、「殆ど全くほとん」なる語を用ひ、久米に笑はれたる記憶あり。今「抽齋」を読めば、鷗外おうぐわい先生まも亦「殆ど全く」の語を用ふ。一笑を禁ずる能あたはず。

九月一日。

午ごろ茶の間まにパンと牛乳を喫きつし了り、将まさに茶を飲まんとすれば、忽ち大震の来きたるあり。母と共に屋外をくぐわいに出いづ。妻は二階に

眠れる多加志を救ひに去り、伯母は又梯子段のもとに立ちつつ、妻と多加志とを呼んでやまず、既にして妻と伯母と多加志を抱いて屋外に出づれば、更に又父と比呂志とのあらざるを知る。婢しづを、再び屋内に入り、倉皇比呂志を抱いて出づ。父亦庭を回つて出づ。この間家大いに動き、歩行甚だ自由ならず。屋瓦の乱墜するもの十余。大震漸く静まれば、風あり、面を吹いて過ぐ。土臭殆ど噓ばんと欲す。父と屋の内外を見れば、被害は屋瓦の墜ちたると石燈籠の倒れたるのみ。

円月堂、見舞ひに来る。泰然自若たる如き顔をしてゐれども、多少は驚いたのに違ひなし。病を力めて円月堂と近隣に住する諸君を見舞ふ。途上、神明町の狭斜を過ぐれば、人家

の倒壊せるもの数軒を数ふ。また月見橋のほとりに立ち、遙か  
 に東京の天を望めば、天、泥土の色を帯び、焰煙の四方に飛騰  
 する見る。帰宅後、電燈の点じ難く、食糧の乏しきを告げんこと  
 を恐れ、蠟燭米穀蔬菜罐詰の類を買ひ集めしむ。

夜また円月堂の月見橋のほとりに至れば、東京の火災愈猛に、  
 一望大なる熔鋳炉を見るが如し。田端、日暮里、渡辺町  
 等の人人、路上に椅子を据ゑ置を敷き、屋外に眠らとする

もの少からず。帰宅後、大震の再び至らざるべきを説き、家人を  
 皆屋内に眠らしむ。電燈、瓦斯共に用をなさず、時に二階の戸を  
 開けば、天色常に燃ゆるが如く紅なり。

この日、下島先生の夫人、单身大震中の薬局に入り、薬剤

の棚の倒れんとするを支ふ。為めに出火の患なきを得たり。胆たんゆ  
 勇、僕などの及ぶところにあらず。夫人は澀江抽斎しぶえちうさいの夫人い  
 ほ女の生れ変りか何かなるべし。

九月二日。

東京の天、未だ煙いまに蔽おほはれ、灰くわいじん燼じんの時に庭前に墜おつるを見  
 る。円月堂ゑんげつだうに請ひ、牛込うしごめ、芝等しばとうの親戚を見舞はしむ。東京  
 全滅の報あり。又横浜並びに湘南しやうなん地方全滅の報あり。鎌倉に  
 止とどまれる知友を思ひ、心頻しきりに安からず。薄暮はくぼ円月堂の帰り報ず  
 るを聞けば、牛込は無事、芝、焦土せうどと化せりと云ふ。姉あねの家、弟  
 の家、共に全焼し去れるならん。彼等の生死だに明らかならざる  
 を憂ふ。

この日、避難民の田端たばたを経て飛鳥山あすかやまに向ふもの、陸続りくぞくとして絶えず。田端も亦延焼またせんことを懼れ、妻は児等こらの衣いをバスケツトに収め、僕は漱石そうせき先生の書一軸を風呂敷ふろしきに包む。家具家財の荷きづくりをなすも、運び難からんことを察すればなり。人慾もと素より窮まりなしとは云へ、存外ぞんぐわい又あきらめることも容易なるが如し。夜よに入りて発熱三十九度。時に○○○○○○あり。僕は頭重うして立つ能あたはず。円月堂、僕の代りに徹宵警戒てつせうの任に当る。脇差わきざしを横たへ、木刀ぼくたうを提ひつさげたる状、彼自身宛然ゑんぜんたる○○○○なり。

### 三 大震に際せる感想

地震のことを書けと云ふ雑誌一つならず。何をどう書き飛ばすにせよ、さうは註文に応じ難ければ、思ひつきたること二三を記してやむべし。幸ひに孟浪を咎むること勿れ。

この大震を天譴と思へとは洩沢子爵の云ふところなり。誰か自ら省れば脚に疵なきものあらんや。脚に疵あるは天譴を蒙る所以、或は天譴を蒙れりと思ひ得る所以なるべし、されど我は妻子を殺し、彼は家すら焼かれざるを見れば、誰か又所謂天譴の不公平なるに驚かざらんや。不公平なる天譴を信ずるは天譴を信ぜざるに若かざるべし。否、天の蒼生に、——当世に行はるる言葉を使へば、自然の我我人間に冷淡なることを知らざるべか

らず。

自然は人間に冷淡なり。大震はブルジョアとプロレタリアとを分たず。猛火は仁人と浣皮とを分たず。自然の眼には人間も蚤も選ぶところなしと云へるトウルゲネフの散文詩は真実なり。のみならず人間の中なる自然も、人間の中なる人間に愛憐を有するものにあらず。大震と猛火とは東京市民に日比谷公園の池に遊べる鶴と家鴨とを食はしめたり。もし救護にして至らざりとせば、東京市民は野獣の如く人肉を食ひしやも知るべからず。

日比谷公園の池に遊べる鶴と家鴨とを食はしめし境遇の惨は恐るべし。されど鶴と家鴨とを——否、人肉を食ひしにもせよ、食ひしことは恐るるに足らず。自然は人間に冷淡なればなり。人間

の中なる自然も又人間の中なる人間に愛憐を垂ることなければなり。鶴と家鴨とを食へるが故に、東京市民を獣心なりと云ふは、——惹いては一切人間を禽獣と選ぶことなしと云ふは、畢——  
 竟意気地なきセンチメンタリズムのみ。

自然は人間に冷淡なり。されど人間なるが故に、人間たる事実を軽蔑すべからず。人間たる尊嚴を抛棄すべからず。人肉を食はずんば生き難しとせよ。汝とともに人肉を食はん。人肉を食うて腹鼓然たらば、汝の父母妻子を始め、隣人を愛するに躊躇することなかれ。その後のちに尚余力あらば、風景を愛し、芸術を愛し、万般の学問を愛すべし。

誰か自ら省れば脚に疵なきものあらんや。僕の如きは両脚

の疵、殆ど両脚を中断せんとす。されど幸ひにこの大震を天譴なりと思ふ能はず。況んや天譴の不公平なるにも呪詛の声を挙ぐる能はず。唯姉弟の家を焼かれ、数人の知友を死せしめしが故に、已み難き遺憾を感じるのみ。我等は皆歎くべし、歎きたりと雖も絶望すべからず。絶望は死と暗黒とへの門なり。

同胞よ。面皮を厚くせよ。「カンニング」を見つけられし中学生の如く、天譴なりなどと信ずること勿れ。僕のこの言を做す所<sup>ゆ</sup>以<sup>よ</sup>は、<sup>あんな</sup>澁<sup>しぶさは</sup>沢子爵の一言<sup>いちげん</sup>より、<sup>たうたう</sup>滔<sup>たう</sup>滔<sup>たう</sup>と何<sup>なん</sup>でもしやべり得る僕らず。同胞よ。冷淡なる自然の前に、アダム以来の人間を樹立せよ。否定的精神の奴隸<sup>どれい</sup>となること勿<sup>なか</sup>れ。

## 四 東京人

東京に生まれ、東京に育ち、東京に住んでゐる僕は未だ嘗て愛郷心なるものに同情を感じた覚えはない。又同情を感じないことを得意としてゐたのも確かである。

元來愛郷心なるものは、県人会の世話にもならず、旧藩主の厄くがい介にもならない限り、云はば無用の長物である。東京を愛するものもこの例に洩れもない。兎角東京東京と難とかく有ありさうに騒ありがたぎまはるのはまだ東京の珍らしい田舎あなかも者に限つたことである。——さう僕は確信してゐた。

すると大地震だいのあつた翌日、大彦だいひこの野口君のぐちに遇あつた時である。僕は一本のサイダアを中に、野口君といろいろ話をした。一本のサイダアを中になどと云ふと、或は気楽さうに聞えるかも知れない。しかし東京の大火の煙は田端たばたの空さへ濁にごらせてゐる。野口君もけふは元禄袖げんろくそでの紗しやの羽織などは着用してゐない。何なんだか火事頭巾づきんの如きものに雲うんりゆう龍りゆうの刺さしつ子こと云ふ出立いでたちである。僕はその時話の次手ついでにもう続ぞくぞく続りさいみん罹災民は東京を去つてゐると云ふ話をした。

「そりやあなた、お国くにもの者はみんな帰つてしまふでせう。――」

野口君は言下ごんかにかう云つた。

「その代りに江戸えどつ児こだけは残りますよ。」

僕はこの言葉を聞いた時に、ちよいと或心強さを感じた。それは君の服装の為か、空を濁らせた煙の為か、或は又僕自身も大地震に悸おびえてゐた為か、その辺の消せう息そくははつきりしない。しかしとかく兎に角その瞬間、僕も何か愛郷心に似た、勇ましい氣のしたのは事実である。やはり僕の心の底には幾分か僕の輕蔑してゐた江戸つ児の感情が残つてゐるらしい。

## 五 廃都東京

加藤武雄かとうたけを様。東京を弔とむらふの文を作れと云ふ仰あふせは正に拝承しました。又おひきうけしたことも事実であります。しかしいざ書か

うとなると、そうぼう 忙まじの際でもあり、どうも気乗りがしませんから、この手紙で御免ごめんを蒙かうむりたいと思ひます。

おうにん 応仁おうにんの乱か何かあに遇あつた人の歌に、「汝なも知るや都は野べのゆふひばりあが夕雲雀揚るを見ても落つる涙は」と云ふのがあります。まる丸の内うちの焼け跡を歩いた時にはざつとああ云ふ気がしました。みづききやう水木京た太氏たなどは銀座ぎんざを通ると、ぽろぽろ涙が出たさうであります。

(尤も全然センチメンタルな気もちなしにと云ふ断ことわり書があるのですが)けれども僕は「落つる涙は」と云ふ気がしたきり、實際は涙を落さずにすみしました。その外ほか不謹慎の言葉かも知れませんが、ちよいとも珍しかったことも事実であります。

「落つる涙は」と云ふ気のしたのは、勿論こんなにならぬ前の東

京を思ひ出した為であります。しかし大いに東京を惜しんだと云ふ訣わけぢやありません。僕はこんなにならぬ前の東京に余り愛あいじや惜くを持たずにゐました。と云つても僕を江戸趣味の徒とと速断そくだんしてはいけません、僕は知りもせぬ江戸の昔に依依恋恋いれんれんとする為には余りに散文的に出来てゐるのですから。僕の愛する東京は僕自身の見た東京、僕自身の歩いた東京なのです。銀座に柳の植うわつてゐた、汁粉屋しるこやの代りにカフエの殖ふえない、もつと一体に落ち着いてゐた、——あなたもきつと知つてゐるでせう、云はば麦稈むぎわら帽ぼうはかぶつてゐても、薄羽織を着てゐた東京なのです。その東京はもう消え失うせたのですから、同じ東京とは云ふものの、何処どこか折り合へない感じを与へられてゐました。それが今焦土せうどに變つ

たのです。僕はこの急劇な変化の前に俗悪な東京を思ひ出しました。が、俗悪な東京を惜しむ気もちは、——いや、丸の内の焼け跡を歩いた時には惜しむ気もちにならなかつたにしろ、今は惜しんでゐるのかも知れません。どうもその辺は<sup>へん</sup>ぼんやりしてゐます。僕はもう俗悪な東京にいつか追憶の美しさをつけ加へてゐるやうな気がしますから。つまり一番確かなのは「落つる涙は」と云ふ気のしたことです。僕の東京を<sup>とむち</sup>弔ふ気もちもこの一語を出ないことになるのでせう。「落つる涙は」、——これだけではいけないでせうか？

<sup>なん</sup>何だかとりとめもない事ばかり書きましたが、どうか悪<sup>あ</sup>しからず御赦<sup>おゆる</sup>し下さい。僕はこの手紙を書いて了<sup>しま</sup>ふと、僕の家<sup>あ</sup>に充満し

た焼け出されの親戚故旧と玄米の夕飯を食ふのです。それから堤燈ちやうちんに蠟燭らふそくをともして、夜警やけいの詰所つめしよへ出かけるのです。以上。

## 六 震災の文芸に与ふる影響

大地震だいの災害は戦争や何かのやうに、必然に人間のうみ出したものではない。ただ大地だいちの動いた結果、火事が起つたり、人が死んだりしたのにすぎない。それだけに震災の我我作家に与へる影響はさほど根深くはないであらう。すくなくとも、作家の人生観を一変することなどはないであらう。もし、何か影響があるとす

れば、かういふことはいはれるかも知れぬ。

災害の大きかつただけにこんどの大地震は、我我作家の心にも大きな動揺を与へた。我我ははげしい愛や、憎しみや、あはれ憐みや、不安を経験した。在来、我我のとりあつかつた人間の心理は、どちらかといへばデリケエトなものである。それへ今度はもつと線の太い感情の曲線をゑがいたものが新あらたに加はるやうになるかも知れない。勿もちろん論その感情の波を起伏きくくさせる段取りには大地震や火事を使ふのである。事實はどうなるかわからぬが、さういふ可能性はありさうである。

また大地震後の東京は、よし復興するにせよ、さしあたり殺さつぷ風景うけいをきはめるだらう。そのために我我は在来のやうに、外界

に興味を求めがたい。すると我我自身の内部に、何か楽みを求めるだらう。すくなくとも、さういふ傾向の人は更にそれを強めるであらう。つまり、乱世に出合った支那の詩人などの隠棲いんせいの風流を楽しんだと似たことが起りさうに思ふのである。これも事実として予言は出来ぬが、可能性はずぶんありさうに思ふ。

前の傾向は多数へ訴うったへる小説をうむことになりさうだし、後の傾向は少数に訴へる小説をうむことになる筈である。即ち両者の傾向は相反してゐるけれども、どちらも起らぬと断言しがたい。

## 七 古書の焼失を惜しむ

今度の地震で古美術品と古書との滅びたのは非常に残念に思ふ。

へいけいくわん  
表慶館に陳列されてゐた陶器類は殆ど破損したといふことで

あるが、その他にも損害は多いにちがひない。然し古美術品のこ

とは暫らく措き古書のことを考へると黒川家の蔵書も焼け、安

すだけ  
田家の蔵書も焼け大学の図書館の蔵書も焼けたのは取り返し

つかない損害だらう。商売人でも村幸とか浅倉屋とか吉吉

だとかいふのが焼けたからその方の罹害も多いにちがひない。個

人の蔵書は兎も角も大学図書館の蔵書の焼かれたことは何んとい

つても大学の手落ちである。図書館の位置が火災の原因になりや

すい医科大学の薬品のあるところと接近してゐるのも宜敷くない。

休日などには図書館に小使位しか居ないのも宜しくない、(その

為めに今度のやうな火災にもどういふ本が貴重かがわからず、従つて貴重な本を出すことも出来なかつたらしい。書庫そのものの構造のゾンザイなものも宜敷くない。それよりももつと突き詰めたことをいへば、大学が古書を高閣かうかくに束ねるばかりで古書の覆ふくく刻を盛んにしなかつたのも宜敷くない。徒らいたづに材料を他に示すことを惜んで竟つひにその材料を烏有ういうに帰せしめた学者の罪は鼓つづみを鳴らして攻むべきである。大野洒竹おほのしやちくの一生の苦心に成つた洒竹しやちく文庫の焼け失せた丈だけでも残念で堪らぬ。「八九間雨柳はつくけんやなぎ」といふ士朗しろうの編んだ俳書などは勝峯かつみね晋風しんふう氏の文庫と天下に二冊しかなかつたやうに記憶してゐるが、それも今は一冊になつてしまつた訣わけだ。

(大正十二年九月)

# 青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 大正十二年九月一日の大震に際して

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>